

第 37 期第 3 回長崎県社会教育委員の会議 議事録

開催日時	令和 5 年 6 月 27 日（火） 13:30～16:00
開催場所	県庁 7 階 教育委員会室
出席者	<p><b>【社会教育委員】</b>          本田委員長、郷野副委員長、棕本委員、峰委員、松山委員          林委員、平山委員、久保田委員、野間委員、藤田委員、有川委員          北島委員、一瀬委員、梅木澤委員、岩本委員、他 1 名（※非公表）          計 1 6 名</p> <p><b>【事務局】</b>          （生涯学習課）          加藤課長、森総括課長補佐、馬場参事、谷口参事、大町課長補佐          永田係長、深堀指導主事、小島指導主事、柴田指導主事、          峯脇指導主事、徳永主事          計 1 1 名</p> <p><b>【関係課】</b>          人権同和对策課、長崎図書館、県青少年育成県民会議          計 4 名</p>
(1) 関係各課からの連絡	<p>(事務局)          協議の前に各課からの連絡を行う。長崎図書館の説明をお願いする。</p> <p>(県立長崎図書館)          本日は昨年度末に導入した、電子書籍サービスとミライ o n 図書館アプリの紹介をさせていただく。これらはミライ o n 図書館と郷土資料センター共通のサービスとなっている。</p> <p>まず電子書籍サービスについて。コロナ禍で、図書館に直接行けないという状況が生まれ、全国的にも意識が高まり、ミライ o n 図書館でも電子書籍サービスを導入することになった。ネット通信が可能な環境で、県内、県民であれば、誰でもどこでもミライ o n 図書館の利用登録ができ、専門書や長崎に関する郷土資料や実用書等、約 1900 タイトルの電子書籍が閲覧できる。今年度はさらに増やす予定。電子書籍ならではの便利な機能として、一部対象外のものもあるが、文字の拡大や音声読み上げ機能があり、幅広い年代の方にご利用いただけ</p>

る。バリアフリーの観点からも有効な機能である。長時間使うと目が疲れてきたりするため、使い方を考えないといけないが、活用していただきたい。

次にミライo n図書館アプリについて。このアプリには便利な機能がいくつかある。このアプリとマイナンバーカードを利用することで、直接来館しなくても、利用者登録が可能となっている。図書館に来館できない方にはこの機能を使っていただくと利用登録から電子書籍閲覧まで、来館せずに行えるようになっている。

また、このアプリは利用者カードの機能を有しているため、来館した際は、利用カードを持たなくてもスマホで利用できる。特に今年度は、離島半島地区の方を中心に、このサービスの周知に力を入れており、すでに壱岐、対馬、新上五島も含めた五島地区の県立高校や図書館などを巡回して、このサービスを紹介している。さらに半島地区の県立学校等への訪問を計画しており、今後も周知活動を続ける。

図書館は日頃から様々な年代の方が集う場所となっている。多種多様なイベントを催すことで、地域住民の交流の場にもなっている。

このサービスを利用した方が、ミライo n図書館だけでなく、地元の図書館を利用してみたい、本を読んでみたいと思うきっかけになればと考える。今後もサービスの充実と発展に取り組んでいく。

先日の日曜日は、雨だったが多くの利用者が来館した。明日からは、カフェスペースに新しい飲食店が入る。ぜひ皆様にも一度図書館へお越しいただきたい。

(事務局)

長崎県人権同和対策課の方から人権出前研修の案内資料が配布されている。研修について詳細を御覧になり、御活用いただきたい。

(2) 協議

「地域総がかりでの家庭教育支援の推進」

(委員長)

本日は3回目ということで、地域総がかりの家庭教育支援の推進をテーマに、協議を進めたい。今までの整理をすると、昨年9月第37期の方向性について話し、2月の第2回の会議で地域学校協働活動についての御意見を頂戴した。

前回の会議の柱、地域学校協働活動の内容といただいた御意見について、さらに今回の家庭教育支援について事務局に説明をお願いする。

(事務局)

前回の会議で、地域学校協働活動の推進を議題に、委員の皆様方に御協議いただいた。資料2ページを御覧ください。協議の中で、地域学校協働活動、地域学校協働本部といった言葉を整理し、先生だけでなく、一般の方にもわかりやすく伝えてもらいたいという御意見をいただいた。このことを受けて、資料のように整理した。

地域学校協働活動とは、幅広い地域住民の参画を得て、一つは地域全体で、子どもたちの学びや成長を支える活動である。もう一つは、学校を核とした地域づくりを目指す活動である。このように整理をした。

また、地域学校協働本部については、地域学校協働活動を推進する緩やかなネットワーク体制だということで整理をした。

この活動の推進においては、説明会、研修会を通して、先生方、保護者、地域の皆様にも、活動の目的とともに、委員の皆様からいただいた活動の価値や、様々な実践事例を伝えながら、県内に広げていきたい。

また、コーディネーターの育成、地域の様々な団体との連携や繋がりがとても重要であるといった御意見もいただいた。引き続き、研修会を通して、学校と地域を結ぶパイプ役である人材を、育成していきたいと考えている。

(委員長)

続いて家庭教育支援について、説明を事務局にお願いします。

(事務局)

長崎県の家庭教育支援事業について説明する。長崎県では、地域みんなで子どもを育み、誰もが安心して子育てできるやさしい長崎県の構築をめざし、家庭教育支援事業を行っている。本事業はながさきファミリープログラムを軸に展開している。ながさきファミリープログラムとは、参加者同士がテーマに沿って語り合い学び合い、共感したりしながら、楽しく子育てのヒントを得ることができるよう構築された参加型学習プログラムである。話し合いを進める方をファシリテーターと呼び、県で認定をしている。今年度、ファシリテーターとして活動を希望される方が県に149名。県内の有志で結成された長崎県ながさきファミリープログラムファシリテーターの会というものもある。

県の事業については、大きく三つある。

一つ目は人材育成。先ほど述べたファシリテータの会でも、スキルアップ研修会を開催しており、市町でも、フォローアップ研修会を行っている。

県では3回、新規認定とフォローアップの研修会を開催予定。今年度は10月17日に長与町、24日に佐世保市、30、31日の2日間で小値賀町での研修を予定しており、活水女子大学の田中先生に、思春期の子どもの理解ということをお話をいただくことになっている。できるだけ多くの方に参加していただき、地域の人材育成が図れるようにしていきたい。

二つ目は周知啓発。チラシやホームページ、PTAの研修会等で、ながさきファミリープログラムの周知啓発を行っている。昨年度、12の市町で108回、3,729名の参加があった。今年は全ての市町でながさきファミリープログラムを実施できるよう、周知啓発に当たる。

三つ目は学習機会の提供。ながさきファミリープログラムは、保護者の方はPTA研修会で行うことが多いが、今後は年代を幅広く広げ、高齢者や、中高生、企業でも実施できるように働きかけをしていく。先月、シニアいきいきカレッジで、家庭教育支援の講座を行った。参加者からは、この講座を受け子育ては自分に関係ないと思っていたが、「自分のこととして地域の子どもをちゃんと見ていきたい」「考え方を変えていかなければと思った」といった感想が聞かれ、満足度も98%だった。ながさきファミリープログラムが幅広い年代で有用性があると感じている。

このような取組を通して、地域みんなで子どもを育てていくという意識の醸成を図っていきたい。

(委員長)

次にココロねっこ運動について、お願いします。

(青少年育成県民会議)

ココロねっこ運動に関連して、地域での取組を紹介する。ココロねっこ運動は、子どもをどう育てるかということも大事だが、まずは大人のあり方を見直しましょうという運動。県民一人一人でも、いろんな地域の団体でも活動でき、様々な立場の方が活動できる運動である。

子どもの育つ環境を良くすると言い換えられるが、子どもにはできない。大人がしないと、今の環境を変えられないという状況の中で、ココロねっこ運動の一つとして、取り組んだ地域の一例を地区の取組と、家庭の日の取組として紹介する。

まず地区社会懇談会について。県青少年育成県民会議は、啓発をする団体であり、例えば、困っている子どもや子育てに困っている御家庭があっても、支援をする機能は持ち合わせていない。周知をして、啓発、関心をもってもらうことが業務であり、関連した団体として、市や町、地区や校区にある健全育成協議会といったそれぞれに、地域で活動していただいている。そのうちの、大村市旭が丘小学校区青少年健全育成協議会の取組を紹介する。

資料には、目的として、子どもたちが育ちやすい地域環境づくりとある。どう育つかということより、育ちやすい環境を作ること、そして、核家族化した今だからこそ一堂に会し、時を共有する中で絆を深める。大人も子どもも顔見知りになり、仲良くなるとある。

そして、9地区6会場で実施し、一カ所で実施することは簡単だが、地域へ出向き、出前形式をとることで膝を交えて本音で話すとある。小さい集団の方が、関わりも深くなる。そういったことを長年取り組んでいる地区の健全育成協議会である。

実際にコロナ禍前まではずっと行われていた。コロナで中断され、なおかつ働き方改革もあり、全ての地区に先生方が来るということはかなり難しくなっており、今後の課題である。内容は、映写会やながさきファミリープログラム等があり、地域で取り組まれてきていたが、地区ごとに開催するよりも1度にまとめて開催することの方が増えている。家庭教育支援という面では、保護者の支援。お父さんお母さんが家で心にゆとりを持って子どもを見られるような支援。地域の懇談会で他の地域の方から、「大きくなったね」と声をかけられる、というようなことで、保護者の心に余裕ができたり、子どもをちょっと離れたところから見て、成長を感じたりできる。また、地域の方と話すことで、こんな方が地域にいるということも、家庭の支援に繋がるのではないかと考える。

次は、家庭の日の取組でお父さんお母さんが働いているところに子どもが行くという1日職場体験の試みをDVDにまとめたものを御覧いただく。

**【DVD視聴】**

職場でできる家庭の日。子どもにとっても保護者にとっても有意義な時間になった。このような取組が長崎県内の企業でもっともっと広がるといいとの思いで取り組んだが、反省点がある。マスコミに入ってもらい「家庭の日」を企業に広めようと取り組んだが、なかなか叶わず、これで終わってしまったという非常に苦い反省がある。やはり広がらないと意味がない。今から御協議されると思うが、一つの取組が、県内にしっかりと広がり、家庭教育支援が県内どこでも、取組まれることを願う。

(委員長)

これまでの内容に対し、御質問等あればお願いします。

(委員)

ミライオン図書館のパンフレットはたくさんあるか。今高齢者にスマホを使った活動をしているが、ぜひこれを、高齢者さんに触っていただきたい。パンフレットがあればいただきたい。

(長崎図書館)

はい、ございます。ぜひ活用の程よろしく申し上げます。

(委員長)

他にございませんか。

(委員)

家庭の日の第3日曜日、大浦地区の取組だが、グラバー園は第3日曜日に長崎市民無料、タータンチェックを身につけるとビールが半額で飲めるという取組をしている。我々民間事業者も、最近第3日曜日にイベントを集中するようになってきた。

観光案内所でも、第3日曜日にスタンプラリーの企画をしている。グラバー園や孔子廟等、普段観光客は行くが、地域住民も地域の財産を見に行こうといった企画を第3日曜日に合わせると、入場無料で楽しめる。第3日曜日にこういう企画が定着してきて、いいと思う。

(委員)

家庭の日関係でお尋ねする。第3日曜日に学校では部活動をしな

というような約束事があったような気がするが、現在はどのような状況かお尋ねしたい。

(課長)

部活動のガイドラインができ、原則第3日曜日の家庭の日には部活動はしないということになっている。ただ、どうしてもそこに大会が入るといったような状況はあると聞いている。

(委員長)

確かに、数年前に部活動のガイドラインは作成してある。

(委員)

6月の第3日曜日に大浦地区では、親子や、地域の方々を巻き込んで居留地のゴミ拾いをしていたかと思うが。それから大浦は土曜日に子ども食堂をされていますよね。そういう取組を地域で企業の方とか、商店の方々と結びついて広くされているところが、大浦地区が長崎市内では目立っているのかなあというふうに見せていただいたが、いかがか。

(委員)

毎年6時半に大浦天主堂に集まり、地域の子どもたちと自治会と、我々で1時間掃除をして、誰もいないグラバー園に入る。6月の第3週に約100人集まり、最近では企業が協賛してくれる等、だんだん大きな取組になってきた。最近大浦地区では何かするなら第3日曜日に合わせようというように定着してきた。

(委員長)

それでは本日の会議について、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

1点目。前回から皆様方には御意見をいただいている。皆様方からいただいた御意見をどのように生かしていくかについても一度確認する。資料の3ページにあるように、ちょうど1年後、令和6年6月に、皆様方からいただいた御意見を、意見書としてまとめ、県内の市町における社会教育の推進に御活用いただくことにしている。

また、現在、県でも教育振興基本計画を策定しているところ。その策定にあたっての参考意見として、皆様方の御意見を活用させていただくことを御承知おきいただきたい。

2点目は、なぜ家庭教育支援の推進を本日で話していただくのか。法的根拠があり、教育基本法の第10条に、家庭教育という項目がある。その第2項に、「国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供、その他の家庭教育を支援するために、必要な施策を講ずるよう努めなければならない。」とある。簡単に言うと、国や地方公共団体は、家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならないということ。長崎県としては、研修会やながさきファミリープログラムの推進をもとに、人材育成を進めているところである。ただし、長崎県が今進めているこの家庭教育の施策もそろそろ、新しい方法を考え直す時期に来ている。本日の会議の中で、長崎県はこんなことができるのではないか、市や町はこんなことをした方がよいのではないかと。ということをお話いただくと、県としても、市や町としても大変ありがたい。

最後に3点目。改めて本日のテーマは、地域総がかりでの家庭教育支援の推進である。家庭教育支援、支援となると、支える側と支えられる側の2者が発生する。支える側は、何かしらの努力をし、支えられる側はそれを享受する。この関係は、確かに当たり前のようだが、どうやら最近はそれだけでは、うまくいかないということが現れてきている。例えば学校教育、PTAである。先生方が自分の苦勞をいとわずに、残業しながら何とか子どもの教育環境を良くしようとしてきた。しかしながら、残業、残業で誰も若者が教育に目が向かない。誰も先生になりたがらない世界になってきている。同じくPTAも何とか子どもたちのためによりよい環境を作ろうと思って活動に勤しむあまり、余りにも自己を犠牲にし、未加入、或いは脱退という状況になってきている。支援する、される。これだけでは、持続可能にならないということが顕在化している。そのような中で、国の教育振興基本計画が閣議決定された。その中で、「Well-being(ウェルビーイング)」この言葉が頻繁に出てくるようになった。Well-beingとは、精神的にも肉体的にも社会的にも個人的にもよい環境であること、そしてこれは個人のみならず、個人を取り巻く地域や企業や環境や社会、全てが、よりよい環境であること、なおかつそれが持続すること。先



ほどのビデオの最後に、子どもたちにとってもお母さんお父さんにとっても良い取組となった。という言葉があった。大浦地区のグラバー園での取組でも、お父さんがタータンチェックを着れば、ビールを飲むことができる、そこに子どもを連れていけば子どもも喜ぶ。さらにグラバー園としては集客が増え、誰もが幸せになる。このような取組がこれからの時代には求められている。

今日話していただく中にこのような Well-being の視点を入れていただくことで、これからの施策に反映できるより良い示唆を、私どももいただけるものと思っている。皆様方の経験や知見に基づいた御意見を存分にいただきたい。どうぞよろしく願いいたします。

(委員長)

ありがとうございました。Well-being という言葉は良い言葉のようで、とても難しい言葉であり、もう一つ言い換えると最適化するということ。全ての年代の人たちが住みやすい街を作っていくと、その基になるところが家庭である、というような解釈をしている。先ほど出された振興計画を現在作っており、ここで出た意見は、その会議の中にも持ち込ませていただきたい。どうぞよろしく願いいたします。それではお一人ずつ御意見を願います。

(委員)

地域総がかりでの家庭教育支援の推進というテーマだが、地域というものが何か私にはよくわからない。地域はどこにあるのかという感じがある。私が住んでいるマンションでは、子どもがいる家庭が減っていることに加え、住民同士がお互いのことをよく知らない。エレベーターで会えば挨拶もするが、よく知らない方が結構いる。私は人に関心があるので、必ずこの方は、何階で降りたとか、記憶するようにして、挨拶も自分からして、会話から情報を引き出すようにしているので、どの階の方がどういう家族構成で、何となくこういう生活でということデータを自分の中に入れていく。私は途中から住んでいるが、最初からお住まいの方でも知らないという人がいる。知らないから、あの何階の人とか、どういう人というのを私が聞かれる。最初から住んでいるのに、何故知らないのかたずねると、会わないからという様子で、関心がない。関心のなさが、地域の力を弱体化させているのではないかとことをすごく感じる。個人が外側に対して関

心を持つということが、だんだん少なくなっていると感じる。家庭教育の前に、地域の繋がりに関心を持つこと。この辺りが、全てにおいて鍵になるのではないか。

(委員)

この問題について家で子どもの貧困の話をした。お金があれば、塾や勉強もたくさん機会がある、スポーツをするにもお金が必要になる。逆に言うと、今はお金がないと体験もできない。例えば、国立諫早青少年自然の家も利用料が上がっている。様々なところで、意欲があってもお金があっても意識が高い家は、いろんなことができる。でも、ダブルワークや、働くことで精一杯な、そうではない家庭にとっては、そうはいかない。それをカバーできるのは、地域の力、子ども会じゃないかという話をした。ただ隣に住んでいる、ただ同じところに住んでいるというだけの、集合体。学年も全然違う、そういうコミュニティ。ちょっとしたグループが、何か一緒のことをすることによってさらに仲良くなっていく。もしかしたら家庭教育を支えていくものの一つの集合体の中に、古いグループではあるが、婦人会や青年会、老人会などと同じように、もう一つ、子ども会を見直してもよいと思う。

(委員)

地域というのが漠然としていて、どういうものなのかピンとこないというのは確かにそう。その点で地域は、やはり人だと。その地域のネットワーク、地域の繋がり、住んでいる方々のお隣同士の顔が見えてこないというのが、都会の方々がピンとこないのかと感じる。私は田舎の地域に住んでいる。地域住民による、学校を核とした地域づくり、例えば、学校で丸付け先生に地域の方が入る。そこで地域の人たちが、丸付け先生が始まる前に集まり、そこに会話が生まれる。これがコロナの時になかったことで、しばらく地域住民同士も会うことがなかった。その時期を過ごして、学校を核とした地域づくりとはこういうことかということを感じ知らされた時期でもある。

また、家庭教育支援の推進ということで言えば、地元の小学校の授業参観に行ったときのこと。地域住民の私も自由に参観できた。そのときに小学校3年生の授業が「家庭学習を見直そう」というテーマだった。おそらく、保護者を意識したものだと思って聞いていた。先生は子どもに向かって話しているが、後ろには保護者がいる。「学習時

間は別として、1日1時間家庭学習として勉強して、7日だから、7時間。それを分にして420分の勉強時間を1週間で確保するんですよ」「土日に予定が入るとなれば、あらかじめわかっているならば、前の方に振りかえる必要があるんですよ」こう言われた。だから、予定があるからしなくていいや、ラッキー、ではない。そういうところまで、学校の先生が子どもと大人と一緒に考えて欲しいと意識されて、授業の中で言われていたのが非常に印象的でした。

(委員)

私はながさきファミリープログラムのファシリテーターをしている。コロナ禍で約2年活動できず、市の依頼がくることもほとんどなかった。先日久々に依頼があり、平戸市の市P連の会長研修会でプログラムをした。人が集まってわいわいするのに、皆さん慣れておらず、お子さんが何人かいる方は、コロナ前の研修に参加された方もいたが、人とどう関わったらいいか戸惑う場面も見受けられて、私自身もファシリテーターの勘を取り戻すのに少し時間を要した。その時は「子育て」というかなり大き過ぎるテーマをいただき、地域とつながる子育てということで、子育て真っ最中の参加者に、どういうお子さんに育てたいかというテーマで、マンダラートという枠の中に理想の子ども像を挙げていただいた。その後KJ法で書き出し、学校・地域・家庭という三つの欄に明日からできることについて一班4、5人で考えていただいた。その中で印象的だったものが、夢を持つ子どもであって欲しいという願い。まず私たち大人が、夢を持つということが、できているかということで話がはずんでいる班があった。たまたま平戸海を指導したわんぱく相撲の指導者の方がその班におり、夢をもつ子どもというのは、プロや活躍している人に触れる機会を持つと良いのではないかという意見が出ていた。人の宝といったプロの活躍している人に触れる機会を与えるのも大事であり、子どもに接している私たち親や大人世代が楽しそうに夢を追って生きている後ろ姿を見せるということにも、話が行き着いた。子育て世代のお母さんは産休明けすぐ働いている。福利厚生が充実している職場で1年間休める方もいるが、お母さんお父さん世代の皆さんが家と職場を行ったり来たりということも多くて、支えられる側ということで考えると、子育てが落ち着いた世代の方を、どんどんイベントに巻き込んでいくというのもありじゃないかという意見も出た。読み聞かせや子ども食堂に参加

して、そういった場で、おばあちゃん世代に入りかけた方が活躍される。また、家庭教育というが、家の中にもうまくいかないことが多く、家から一步出て、学んできたことを家に持ち帰って家族で共有するというのも、家庭教育ということに繋がるのではないかと思う。親が出て行ってそれを子どもに伝えるとか、子どもも親も一緒に地域のイベントに参加して、それを各家庭に持ち帰り、ああだったね、こうだったねと、学び直しや振り返りという時間もとても必要な時間だと感じた。親子で参加や親だけ参加の地域で歩きながら、ゴミ拾おう会もしている。2ヶ月に1回ほどの開催だが、まちづくり協議会が主催でやっており、まちも綺麗になるし、自分の心もすっきりする。一石二鳥のそういうイベントを大切にしていきたい。

(委員)

私が住んでいる地域が駅のすぐ近くの住宅地だが、地域とのつながりが強い。御高齢の皆さんが小・中学生にも進んで声をかけてくださったり、学校に足を運んでくださったりすごくお世話になっている。そんな地区だが、コロナでいろんな行事がなくなってしまい、3年経ってやっと再開できる状況になってきたところ、今度はそのお年寄りの身体がきついということになり、そういう時、子育てをしている世帯とおじいちゃんおばあちゃんのちょっと中間ぐらいの世代という方がいなくて、どうしようかと会議の中で話題に挙がった。繋がりという面で言えば、保護者間の繋がりもコロナで希薄になっている。今までは、顔をあわせればみんな知り合いという感じだったが、マスクで顔も半分かくれ、上半分しか見えない状態でこの3年間過ごしてきた。子ども同士の中でちょっとしたいざこざがあったときも、親同士が知り合いだったら、もういいよ、それぐらいお互い様よ、で済んでいた話が結構こじれて、緊急の会が開かれることがあった。親同士の小さな繋がりがないことによりこじれていることが寂しいなと感じる。最後に、コロナ禍が終わり、行事を前の形に戻すことはできるけども、PTA会員の気持ちを戻すことができず、どうしたらいいかと悩んでいる。やはり、繋がり希薄になり生じている温度差が課題だと思う。

(委員)

何年前に、お父参観、お母参観という、お父さんお母さんを参観

しに行く取組をしている市があり、すごくいいなと思った。学校でも社会科見学や職場体験、就業体験等あるが、それを地域参観のような形です。受け入れてくれる企業や、仕事している方を探すのは、コロナ禍で特に介護施設や病院関係は駄目ということで、先生方は苦労されているという印象があった。地域と企業が地域参観企業という具合に、年に1回とかではなく、いつでも参観してもいいよとか、子どもが興味あるときはいつでも仕事見に来ていいというようになればいい。実は今週娘が、宿題で車椅子を載せるタクシーのことを調べるといことで、地域のタクシー会社に飛び込みで行ったら、丁寧に対応してくれて、娘は「すごくいい社長だった。私は〇〇タクシーにしかならない」と言っていた。まだ子どもなので、お金にはならないが、企業側も将来の顧客、ファンをつくることにつながると思う。地元では一次産業の方も多く、牛飼いにになりたいとか、漁師になりたいという子どもも出てきている。この間、高校で、職業講話をさせていただいた。普通の商業高校は、就職する子が多いため、地元企業の説明会が頻繁に開かれているが、その高校は進学校で9割以上が進学し、今回のような職業講話は初めてだった。アンケートには、「地元の企業に対して今はできないかもしれないけど何かしたい」「戻ってきて、就職するという道もあると思いました」という意見も多かった。地域で育って、外に出ていく子どもに対して、地域と関わりを持ち続ける種まきになる。地域学校協働といことで、「参観OK企業」、「参観OKお父さんお母さん」というようなリストがあれば、探しやすくて先生の負担も軽減され、地域も子どもたちの顔が見える取組として、ココロねっこの横に「参観OK」みたいなのを載せてもいいのではないかと思う。

PTA関係でもう一つ。PTA会長になると大量の資料が渡され、仕事を引き継ぐ。今までしてきたことが蓄積されるアプリを活用して引継げば、新たに同じプリントを作らなくていい。地域の団体の方にもいっぺんに連絡ができ、地域支援会議といった会議は年2回程度しかないなので、リアルタイムで連絡事項を伝えることが難しかったが、簡単に連絡できる。そのアプリは無料で使えるらしいので、こういうICTの活用も、今の時代はあっていいと思う。

(委員)

コミュニティセンターは、地域の方が集う場所であり、さまざまな

団体がたくさん集まってくる場所なので、地域やネットワーク、繋がりといいものが本当に深いところではあるが、最近のコロナ禍で、どの団体も活動ができていない。特にPTAは繋がりが少なく、次の役員が決まらないとか、誰がどこの人だろうということがわからないという話も耳に入ってくる。その中で、公民館主催ではないが、地域の若いお母さんたちが、鉢にお花を浮かべる花手水で町をPRしようという活動を3月頃から始め、まちを盛り上げる活動をしている。また、PTAのリーダーを中心に、まちをアピールしようということで、SNSを使い、横の繋がりを持ってまちおこしの活動を活発にしている。そういう中で、地域の大人も自分にできることで、できる範囲で、まちを盛り上げようということになり、若い人とも繋がってきて、とてもいい効果が上がってきていると感じている。コミュニティセンターもこういう横の繋がりを広げる活動に多く関わっていけるように頑張りたい。

(委員)

地元では、ほとんどの方が先輩で、活動を若い人にどうつなげていけばいいかと悩んでいる。やっていることを呼びかけて、「私たちが後を継ぎます」、「では後はよろしくね」というのを期待して、引き際を一生懸命模索している。その一つの取組がDMの米の研ぎ汁発酵液作り。お米を持ち寄り、研いでご飯を炊き、おにぎりにして食べる。その時に炊き立てのご飯はおいしいという話になり、子どもたちは炊き立てのご飯で作ったおにぎりをどれくらい食べているだろうかと話した。こういう活動に性別、年齢不問ということで、お母さんたちにも来ていただいて、私たちがしていることに、意義を見いだして、後を継ぎますという人が出て来てもらえないかと思うが、小学校に行くと、お母さん方にありがとうと言われるが、では私たちが引き継ぎますということはない。地域の女性を何とかしようと思うけれど、敬遠される。その一つの原因が、世の中の男の人たちの意識がある。私は旅行も夕食時間の5時には帰っている。そういう気持ちで女性が活動しているから、あとは引継いで私がするなどという考えには至らない。また、女性は頑張りたい。外に行ってお世話をしたい。PTAの人が会員になってくれたらあれもしたいこれもしたい。お願いねと言いたい。家庭のことで地域づくりも、基になっているのは女性だと思う。祭りで担ぐことなどは男性ですが、PTAを立ち上げた時の

母親はほとんど専業主婦だった。現在はそうではないから成り立つはずがない。この前提条件と意識改革なしで、地域は成り立っていかないとと思う。

(委員)

私の学校の周辺には小さな地域しかなく、小・中学校もかなり子どもが減っている。毎月幾つも地域の会議に出席し、その中で感じるのが、地域のお祭りも、委員会も、とにかく子育て世代がいない。頑張っているのは50代後半から70代ぐらいまでの方。コロナ禍が収まり、小・中高生が地域に入り始めたが、そこでも空洞化が起こっており、高齢者と子どもが、頑張り始めた状況。子育て世代を、地域の中に呼び戻すということが、非常に難しいと感じている。加えて、学校ではプライバシーということで保護者の職業を聞かない。保護者の方がどこで、どのような仕事をしているのか、何時頃家にいるのかということが全くわからない。生徒指導や生徒支援でトラブルがあった時なども、情報がない中で保護者の方と接すると、うまくいきにくく、保護者の協力を得にくい。日頃から配慮のあまり、遠く距離を置いて、敬遠しがちになってしまう状況にあるところが、学校の問題でもある。

また、地域の補導委員会が子どもの補導をすることはほとんどない。地域に子どもがおらず、必要がない。自宅の中にいると思うが、外に出ていない。情報交換をする中で、地域の方が子育て世代に対する目が厳しいと思うことがある。学校に遅刻ぎりぎりで行っている子どもがいると、母親がなぜちゃんと出さないのか、という。また、不登校といった状況に対し、親がちゃんとしていない、というような言い方をされる方がいる。そうではなくてすごく苦しんでいるんですよという話はするけれども、子育て世帯が地域で相談できる状況にならない。逆に地域の人に知られたくないという状況があると思う。こちらから何か支援したいと家庭に行けば、どうしても押しつけがましくなる。家庭はSOSを出しきれず、本当にどうしようもなくなった時にしか、SOSが出せないという状況がある気がする。PTA活動に関しては、PTA総会の出席が悪くて、総会は、やめていいのではないかと思っている。コロナの時に書面審査でとおしたのだから、コロナが終わってから復活させる意味があるのかとも思う。せめて人がたくさん集まる体育祭の後とか、そういう感じでない限りは、意味をなさなくなってきている。実際、お忙しいだろうし、忙しい時間を割いて

でも行こうと思えるぐらい、主体的になるようなコンテンツやイベントがないというのが実際なのかと、保護者を見ていて思う。

(委員)

あるPTAの役員さんからPTAの運営は難しいと相談をいただいた。地域との連携と言う前に、PTAのモチベーションの差が役員とそれ以外が全然違う、学校の先生は忙しい、という相談を2時間ぐらいじっくり聞き、今日皆さんの話も聞いて、複雑な問題だと改めて感じている。まちづくりの人間からすると、まちづくりは、20代30代といった子どもを持つ前の若者には、割と興味があるのではないかと思う。だから地域に参加する20代前半の人が少しずつ増えている。地域の行事に行くと、お祭りで現役世代は60代、70代の人が多い。大体どの地域に行っても60、70代の自治会長レベルの人と、とんで学生とか20代の若者や私みたいな人がいて、70代の自治会長さんたちが引退すると、4,50代の子育て世代のまだ仕事をしている世代はどうしても抜けている状態。そうなった時に、まちづくりはまだ若い人を巻き込む余地があるという気がする。学校や教育というのは、興味関心がない中、ただ子どもができたことで、いざ学校でPTAとなった時に初めて保護者の方が、地域デビューをする。子どもがきっかけで地域デビューする。それはすごくいいことだと思うが、今まで社会的な貢献とか、繋がりとかに関心のなかった20代30代、40代の方が、子どもができたことで、PTAに引っ張られていくと、どうしてもアレルギー反応が出るという、そういう感じなのだろうと、私は今30前半で同世代ながら思っている。何ができるだろうというのは、非常に難しい問いを与えられたと思っている。制度やそういったものを変えていくことは大事だが、エレベーターで声をかけるといったようなことができる人が1人ずつ増えていかないと、子どものことはできないなど。コンテンツという話もあったが、関わってみようと思うような、そういった地域の繋がりを持った方が楽しい。メリットとかお金ではないとは思いますが、敬遠している人というのは、つながるのが面倒くさいと言ってしまおうと思うので、どうしても儲かるとか何かメリットとかを含めて、どうすればそういう人たちを巻き込めるかというようなことを思った。



(委員)

子育てが大変で、余裕がないということはわかる。自分も子育てしているときは一生懸命だった。家庭教育というテーマについて、子どもに生きる力を与えるのが家庭なのかと思う。実はこの前特別支援学校の運動会に参加させていただいた。子どもが生き生き、伸び伸びしていた。私の運動会のイメージは、そこが曲がっているとか、もっと右手挙げてとか、そういう教育を受けてきた。特別支援学校という、特化された学校だからかもしれないが、まず先生が笑顔だった。そして子どもたちもみんな笑顔で伸び伸びと。こういう運動会は初めてで、いいなと思った。コロナがあり、いろんなことが3年間できなかったが、ちょうどいい機会だったと思う。教育も生活も。今お母さんが働いていて、本当に親が家にいないという状況になっている。発想を変えて、今からの時代はどうしたら子どもが幸せなのか、生きる力を持てるのかと。この前子どもたちに、「自分好きな子、手を挙げて」と言ったら、ほとんど挙げなかった。私はそれがショックだったが、担当の方は、愛されているという自信がないからじゃないですかと言われた。家庭で体験していないから、そういうことが起きていると思うので、ぜひ体験型の教育を今から何かできないかと思うし、笑顔がないと幸せにはならないんじゃないかと思う。

(委員)

私は家庭教育に10年携わってきた。たくさんのご意見を聞き、皆さんが感じている不安は結構同じだなと思う。それぞれ立場は違うが、地域総がかりでの家庭教育支援の推進というお題をいただいて、それをどう進めていくかがとても重要だと。その時に私はなぜうまくいっていないのかと考えた。何故支えられる人に届いていないのかという原因を考え、何人かのお母さんにインタビューをした。実際学校行事になかなか出られない方にどうしていけないのか聞いていくと、一つは家庭教育という言葉だという。家庭教育と言われた途端に、私たちがやらなければならないという意識がお母さんに生じる。行政も、支援する方も、家庭教育をみんなでやりましょうって言われた時、お母さんとしては、何でハードルを上げるのかと感じるという御意見が返ってきた。それが問題点の一つなのかと。だから保護者に浸透していかないような気がする。もう一つは、小学生の低学年から高学年ぐらいの30代前後の今どきのお母さん、お父さんに、僕たちがして

いるようなこういう活動を理解できるかと尋ねたら、別にいらないと。ネットにきく。ヤフー知恵袋にどんどん上げれば、いろんな人が教えてくれると。だからプライベートのことにあまり入って欲しくない。正直リアルのお節介はいられないと言う。私はプライベートなことに土足で入っているつもりはないという思いがある。なぜそう考えるのかということが、今私が持っている問題。これだけ皆さんがいろんな活動をして、支える側として頑張っているが、受け取る側にその意識が全くない。みんなで話し合うので集まってくださいと言った時、1割2割しか保護者は集まらない。来ても10人ちょっととか。役員さんだけが来ているっていうのが現実だと思う。何故来ないのかというところをまず僕たちは考えないと、推進していくという点で、県はどうやって県民に、自分たちがやっている事業を有効に利用していただくのかということや、何か新しいことを考えていかなきゃいけない。10年経って、コロナ禍でストップして余計に疲弊してる状態で、さらにその部分を上げていくとなったときに、自分たちができることは何なのか、というところをまず立ちどまって考えないと。ある校長先生が小学校の入学説明会にながさきファミリープログラムをしてくれた。保護者は全員来ている。その時のアンケートは、90%以上が安心できた。地域との繋がりがわかった。入学式の時に会って挨拶ができる。学ぶことができた。そしてその90%に、多分私が今回インタビューした人達も入っていたと思う。それが継続しておらず、クールダウンしている状態というのがどこの地域でもあるのではないかと。今私たちがしているものを県民にちゃんと支えるような形にして推進するために、皆さんがそれぞれの所属されているところで、どんなアプローチをしていけばいいのかということをもっと考えていかなければならない現状に、私は不満を持っています。こうあって欲しい、来て欲しい。学校の先生が、すいません、今日はこれだけしか集まりませんでしたと言うのを毎回聞く。だからその部分を、前向きに前進的に考えていかねばならない。何をしたらいいのかというのは、本当にこれから皆さん社会教育委員として、この地域におられるんですから、それぞれの立場で何をすれば、その人たちの、交流のハートを割ることができるのかということ。そうしなければ、10年経ってもまた同じことをみんなで言っているのかと、私は危惧している。

(委員)

今まで、12 人の方のお話を聞いて、私なりに、考えたことをお話しする。はじめに Well-being というのを念頭に置いて欲しいということだった。みんなが良い状況、幸せを感じるような状況。これって結局多様性を認め合うとか、いろんな考え方をみんな理解しあう、お互いを尊重し合うというような関係が、家庭教育においても必要だという視点に立つことかと思った。地域とはどういうものかわからないという委員さん方がいたが、結局は人だと思う。人を知るか知らないか、というところがまず第1だろうと。地域というのは確かに漠然として地域とは一体何かと言われてもさっぱりわからないけれども、地域の人を知っているわけで、地域の人を知るということは、それが地域を知ることになっていく。地域の人を知って、そしてそれを支える側支えられる側という観点ではなくて、互いが幸せを感じるような、認め合うような関係づくりということできると、今、PTA や婦人会がしていることに、価値づけや意味づけをすることなんだろうなど。PTA の活動や婦人会の活動が一切悪いわけでもないし、それぞれの活動のよさを改めて価値づけをすればいいのではないかと。ただ、今言われているように、前例踏襲型のイベントとか、そういうことがあり過ぎて、それを今コロナという機会の中で、リセットしたり見直すチャンスができたのかと捉えれば、この Well-being の視点に立ってそれぞれPTA の活動、婦人会の活動、子ども会の活動といったものを見直していけば、地域総がかりの子育てというところに結びついていくと思う。そこには当事者意識というのが絶対必要で、当事者意識を持たないから、何で私たちのプライベートの部分に踏み込んでくるんだというような、よくわからないご意見も出てくるし、地域のおじいちゃんおばあちゃんたちも私たちは子育てしよらんという、そういう視点が出てきてしまう。いやいや、地域全体で子どもたちを育てていくんですよと皆さんが認め合う、それが地域の幸せに繋がるんですよという視点に立てば、皆さんが納得できるような納得解になっていくと思う。お節介だと言われることを、お節介ととらえるからお節介であって、これを、支える活動の一つだと認識できるような互いの理解が必要なんだと思う。まちづくり協議会の中で話を紹介する。まちづくり協議会で高齢者サロンをしたいと言ったときに、目の前にいる高齢者の方々が、「俺たちを集めて、すぐ折り紙だ体操だといったことをする。PTA 活動もPTA っていうのはこんな活動、

婦人会というのはこういう活動、みなさんもそう思うでしょうと。しかし、私たちは別に折り紙したいわけでもなければ体操したいわけでもない」と言われたそうです。本人たちは何をしたいのかというところを、私たちは見失っているのではないか。PTAの保護者が本当は何をしたいのか。婦人会の会員さんは何をしたいのか。子ども会の会員さんが何をしたいのかというのを見失っている状態で、こちらから押し付けにいつていると言われた。では、この高齢者の皆さんが、何と言われたか。「私たちはゲームがしたい」と。どんなゲームですかと言ったら、「あつもり（あつまれどうぶつの森）」がしたいと。なぜかと言うと、孫と一緒にしたいと言うそうです。あつもりをしていたら、ばあちゃんちよつと餌やっとなんとか、じいちゃん、ちよつとこころ辺の世話しよつとと言われる。こども、孫は、じいちゃん、ばあちゃん達にそれを言いながら生存確認をしてくれている。孫が今日もじいちゃん餌やってくれよつとばい、ばあちゃんは世話してくれよつとばいと、お父さんたちも話せる。だから今度まちづくり協議会でカフェやっとなんとか高齢者サロンするよつとかなんとか言うけれど、私たちにゲームを教えてくれないかと。私たちが Well-being っていうときの視点はこれだと思ふ。その人がしたいことをうまく組み込んでやる。そしてそこに価値づけ意味づけをしてあげる。だからそういう意味ではPTAの活動、婦人会の活動をどう変えるか、私たち学校教育も、もう1回その当事者、子どもが何をしたい。保護者が一体何をしたい。子ども会の会員さん、婦人会の会員、高齢者が何をしたいのか。そこに立ち戻らないと多分見えてこない。本当に地につく活動というものにならないのかと思ふ。できることをできる人ができる時にとかなんとかいう綺麗な言葉があるんですが、それを本当に実現させるためには、今言ったみたいなことが必要なかなんとか、最近このおじいちゃんおばあちゃんたちに、教えていただいた。

(委員)

毎年、教育長崎振興大会を県下各地で行っている。これは、500名ぐらい入る大きな大会。このサブテーマが、平成5年からずっと「地域ぐるみの教育を考える」。この中で必ず、シンポジウムを行う。昨年度は平戸松浦北松大会だった。シンポジウムでは、平戸市教育長がコーディネーターをして、学校代表1名、地域代表1名、それからPTAも、母親代表という形をお願いした。その中で心に残ったことが

ある。地域代表の方は、ある学校のPTAの会長も兼ねていたが、会員が少ないから活動資金がない。活動資金が少ない、動く会員も少ない、どうすればいいか悩んだが、地域の中の他の団体とネットワークを築きつつあり、自分たちだけでやれないことは、他の団体と一緒に活動すれば、人も集まるしお金も幾らかそこにつぎ込むことができるんじゃないかという話だった。なるほどねと。そういうふうに厳しいところがあると思うが、そこにもし、どこかの団体が一緒に活動するとなると、合わせて事業を行うという形が一つできて補完できるという思いがした。また、企業というのも地域の中の、立派な団体じゃないかと。先ほどの大浦地区の取組のような新たな団体を各地域の中で知ることから始めて、ネットワークを築くということも、ひよっとしたら大事じゃないかと。14, 5年前はですね。自治会があった。その横に育成協議会があった。今もちろんありますが。今よりももっと大きく育成協議会にお願いすれば、そこでうまく回っていて、例えば地域のマラソン大会では、炊き出しは婦人会、進行は青年団にお願いしようということをやっていた。決して昔が良いということではなくて、今ある団体の良いところはしっかり持続しながら、新たな団体の枠組みとか、そういうことにも焦点を当てながら、力を注ぐ方々も出てくるんじゃないかという感じがする。また、私は退職校長会に入っているが、教諭を卒業された方々の会はない。そういう方々が活躍できる仕組みがあればなと感じる。地域にはそういう方がたくさんいる。そういう方々が入れるような仕組みを考えていけたらと思う。

(委員)

私は家庭教育というと、小さな赤ちゃんとか1, 2歳児とか、そのお母さんお父さんをイメージすることが多いが、先日メディアのことで話す機会があり、お遊び広場に来ているお母さんをお願いして、アンケートをとってもらった。インスタの24時間のストーリーズで840人の回答があった。若い世代の人が、インスタを見ているんな情報を手に入れているということに一番驚いた。お遊び広場に来るお母さんも、それを見て来る方が多い。今のお母さんの特徴は、基本真面目だが、コロナの影響もあり、なかなか人に聞けない。近くの人よりも、顔も知らない人の情報を、信じてしまう傾向がある。

それから、保育園等に勤めていると、あまり安易に大丈夫と言うなという風潮がある。子どもの発達が気になるという親に、昔は、「大

丈夫、何年かしたら何とかなるよ、大丈夫」と言っていたが、今はそんなに大丈夫と安易に言うてはいけないところがあり、「気になることがあったら、相談の方につなげましょうか」というような形で対応する。大体で過ごしてきたことが、大体で過ごせなくなった。お母さんたちも、世の中に息苦しさを感じているのではないかと思う。ネットについては、6月のお知らせを紙で用意して置いているが、ほとんどの人が取らない。大丈夫ですかって言うと二次元バーコードで、ネットで見ているから大丈夫ですと。情報は全部、二次元バーコードの中に入っていて、紙で何か書いてメモに留めておくということはないというのが、私の時代とは、隔世の感があるという感じがする。家庭教育支援を考えたとき、イベントを組むと必ずたくさん来る。ハイハイレースやリトミックやりますとか。改めて広報しなくても、そういう日はたくさん人が集まる。だから何か伝えたいことがあるときは、そういう何か親が来たくなるようなことを合わせてやっていくのは一つの方法かと私も思う。来たくなるような仕掛けをして、自分の子に利があるっていうことには積極的に参加されていると感じる。ただ子どもをあまり、よく見ていない。何か片手間に子どもを遊ばせていると感じる。自分の子どももそうだなと思う。子どもをじっと見ていたら、遊びの途中でお母さんの顔をちらっと見ているし、そういう子どものちらっ気づけるお母さんは、きっとそこで言葉をかけてあげて、子どもも安心して、自信をもって、自分のことを好きだと言える子に育つと思う。スタイルで子育てしている若いお母さん、お父さんにはそういうことを伝えたい。ただじっと見ておく、それだけでいいのにと最近とてもそう思う。

(委員長)

キーワードとしては、「つながり」「子育て世代が乖離している」「地域の行事等になってくると一番来て欲しい世代が来ていない」とか出てきた。私は今マンションに住んでいる。最初の委員のご意見どおり、閉ざされた世界。4年前に引っ越した時に一番違和感を覚えたのが、隣の人がわからない。エレベーターに乗って上がる時には小・中学生の子たちに声をかける。声をかけたら変なおじさんがいたって言われるということがあり、これがまさに今の社会構造の一つだと思った。フロアの班長だったため、何をしましょうかというときに、エントランスで会ったら、おはようございます、こんにちは、を知らない

人でもいいので、大きな声で言いましょう。と反発もあったが、4年もいたら皆さんしてくれるようになり、今はあいさつしてくれる人がたくさんいる。そうすると今度は当時、幼稚園に行っていた子たちが小学生になり、小学生が中学生なり、高校生になり、この子たちが一緒に何かしら、会話をするようになる。不思議な現象です。サッカー部の高校生が、友達とエントランスで宿題の数学をしていた。答えが間違っていて。これ違ってるよ、ちょっとエンピツかしてごらんといって解き上げたら、おじさんすごいと言われ、その後私の家に10人くらい来るようになった。そういう繋がりというものがあるのかと。もうその子たちは卒業して、大学に合格しましたとお礼を言いに来てくれた子もいた。社会の構造が変わったときに、こちらが大人として、おじいちゃん世代だが、どう家庭とか子どもたちのことを見ていってやれるか、触れることができるのかということ町内会がない世界で体感した。

入りたくても入れない閉ざされたその空間の中だけの、いわゆる住民グループみたいのがある。その空間だけで年に1回だけ顔を合わせる。どうすればいいのかと、当初引っ越したことを後悔したが、何となく住み慣れて、そういう子どもたちが仲良くなり、あのね、おじさんねって話になることがあることを思えば、やり方もいろいろ、そういう新しいスタイルを作ることもあると思う。先ほどもあったが、意味づけというか、家庭教育に対するさまざまな事業や取組が出されるが、新たな意味で意味づけをしてあげる必要があるだろうと思う。

ネット社会になり、インスタグラムを見て人が集まる。それも今からの一つのやり方である。生成AIが出てきて、物を考えなくなるかならないかという議論がされているが、避けて通れない部分がある。そこをどのようにクリアしていくか。従来通りの繋がりを作るのではなく、新しい価値づけをしてそれを超えるようなものを作る必要がある。さっきのマンションの声掛けも、健全育成には役に立ったんじゃないかと思う。ああいう世界でも人と接して子どもと接していくというのをやっている、面白かった。だんだん年を取り、ある空間でいうと皆が大人になっていくため、小さな子がいなくなる。あと10年もすれば、私たちは70を超える。その子たちも卒業し、子どもがいなくなる空間になる。家庭教育も同じだろうと思う。三世代住んでいるわけじゃない。核家族状態になり一世代ずつが住んでいるので、確かに地域がその家庭の中を見ていかないと、横の繋がりが出てこない。縦

<p>(3) 生涯学習課長 挨拶</p>	<p>の繋がりも多分出てこないと考える。 それでは、進行を事務局に戻す。</p> <p>(事務局 生涯学習課長)</p> <p>本日昼に日本の景気の良いニュースが流れていた。その一方で日本の家庭の貧困状況、小・中・高校生の貧困率に関しては、OECD 加盟国の中でも、極めて厳しい状況にある。家庭教育の重要性、家庭を支える重要性は、これからさらに増していく。本日は皆様から肌感のある様々な角度からのお話を聞かせていただいた。どれも子どもが自分に自信が持てる、自分の未来を信じていることができる、そういう教育をするために、家庭教育が必要だ、重要だと感じているというもの。また、保護者、親が安心して家庭教育に取り組めるような環境や心理的安全性を大事にしながら、言葉自体が少し難しいという声もあったが、家庭教育をどのようにサポートできるかを考える。冒頭の、Well-being については、三方よしという言葉がある。近江商人の商売の理念は、売り手によし、買い手によし、世間によし。そういう理念を持ちながら進めていく必要がある。また、多様な繋がりの中でどのようにして家庭教育を実現していくか。新しい団体や新しい組織、SNSやそういう繋がりの中で、どのような支援ができるのか。本日はたくさん学ばせていただいた。ぜひまた今後とも、皆様に教えていただきながら、社会教育を進めていきたい。</p>
------------------------------	---